# アウシュビッツ強制収容所博物館を訪ねた一日

デューク大学Art,Art History Visual Studies,Japanese Art History
早稲田大学リサーチフェロー
マグダレナ・コウオジェイ

去年の９月に三週間ポーランドに帰った。親孝行と言うか、毎年必ず一回実家に帰るようにしている。そして、去年ちょっと特別で一人日本人の友達を連れて帰った。そうすると、ポーランドの観光でもしようと話になるのは、当然。ポーランドに来る多くの外国人がアウシュビッツ強制収容所博物館を訪ねる。私の実家は、その場所から車で一時間離れているので、近い。私自身も、4回見学している。中学の時一回、大学生の時三回で、毎回外国人の友達を連れて行く。英語だとダーク・ツーリズム(dark tourism)という言い方があって、まさに「暗い観光」かもしれない。残酷で暗いものに引かれていることであろう。

晴れの日も、吹雪の日も、年中無休で開いているアウシュビッツ強制収容所博物館。昼間の時間は、混雑しているので、一人で見学できず、グループごとに行動しないといけない。そしてグループごとに博物館の社員であるガイドがつく。そして日本人の友達と一緒だから、初めて日本語のガイドのもとで、見学することになる。中谷剛さん。ポーランドでの滞在、30年近く、ガイドの仕事も20年以上。

5回目の見学だから、どういう話が出てくるのか、だいたいわかる私が、あの有名な「労働は人間を自由にする(Arbeit macht frei)」という入り口の門の下を通ると、泣きたくてたまらない。どうして人間が他の人間にあんな残酷なことをさせたのか、そういう単純な気持ちで悲しかった。しかし、戦争も暴力も体験していない私が、見学したと言っても、本当の残酷さは、いくらも想像できないことで、センチメンタルな気持ちに過ぎなかったのかもしれない。

中谷さんは、早口でどんどん話が進む。グループは、12－13人ぐらい、私以外みんな日本人であろうという人たち。強制収容所の歴史、組織、囚人の生活、監視人のことなど、聞き取ろうとしている。表面上、強制収容所はとても近代的な性格を持っていた。レンガの建物が並び、幼稚園もあり、囚人が給料ももらっていたこと（実際は、一切お金使えない状態だったが）。ガス室での死、収容所での飢餓。囚人を使った医学的な実験。囚人が反対運動を起こさないために、囚人の間で階層制度を作り、囚人同士お互いに連帯や同情を持たせないような、囚人が囚人を監視するシステムなど。ヨーロッパの20世紀の歴史、反ユダヤ主義の歴史、ドイツと日本の帝国のつながり、長崎に住んだことがありアウシュビッツで殺され、聖人になった神父マキシミリアン・コルベの話。

そして、中谷さんの話が知らないうちに現在までに広がる。私たちまでに広がる。あの医学実験は、私たちのためになったのでは？当時のドイツ企業が強制労働を使い、それが今の経済成長に繋がっているのでは？もちろん仮定に過ぎない話だが、自分にとってのアウシュビッツの存在が、少しずつ大きくてリアルに見えてくる。また、当時の人たちは、ユダヤ人に対しては、ある固定観念を持っていたから、強制収容所にユダヤ人を入れやすかったと言えるが、現在生きる私たちは誰に対してどういう固定観念を持っているのだろう？ヨーロッパでの難民の話、日本での部落民や少数民族の話。ドイツと日本でのヘイトスピーチに関わる法律とそれに関わる問題。

参加者はみんな少しずつうなずきを控え、さらに静けさに陥る。他人の歴史が自分のもののように見え、居心地悪い。被害者、加害者という簡単な枠があるにも関わらず、自分がどこに所属しているのか、自分が「いい人」と思っていたのが、本当なのか、あの強制収容所を作った固定観念だって今も生きているのではないか、などと、考えさせられる。

中谷さんは、「Ａが正しいＢがだめだ」と言うような簡単な答えは出さない。日本人だからこそ、そういう話がしやすいのかもしれない。アウシュビッツ博物館を訪ねるユダヤ人とポーランド人（ロマ、同性愛者の人もそう）は、そんなニュアンスがあって複雑なストーリを聞きたくないのかもしれない。加害者は加害者、被害者は被害者だろう。

二時間が立って、アウシュビッツを出て、近くにあるビルケナウという支部の強制収容所に向かう。その時に、中谷さんと初めて雑談し挨拶をする。中谷さんがびっくりして「あら、僕は今日初めてポーランド人にガイドをした、申し訳ない」というようなことを言う。謙遜の言葉かもしれない。あるいは、相手によって語れる歴史ってだいぶ違ってくるということであろう。考えさせられることばかり。次の世代にどうやって歴史を伝えるかと真剣に考えている中谷さん。

ポーランド旅行で一番刺激になった一日は歴史と現在を繋ぐ中谷さんの話を聞いた日だった。天気は晴れ、ビルケナウの芝生はまだ青い。